

研究タイトル：

近現代日本女性文学

氏名： 小林 美恵子 / KOBAYASHI Mieko E-mail: m koba@kurume-nct.ac.jp

職名： 教授 学位： 博士（文学）

所属学会・協会： 日本近代文学会・昭和文学会・日本社会文学会・佐多稲子研究会他

キーワード： 女性 ジェンダー 戦争 社会 フェミニズム

 技術相談
 提供可能技術：

- 女性文学を中心とした近現代の日本文学研究
- 戦時下の日本文学動向・戦時下政策と女性問題



研究内容： 佐多稲子を中心とする近現代女性文学研究

自身が最初に取り組んだ文学研究の対象は長崎県出身の作家佐多稲子（1904 - 1998）である。1980～90年代は女性研究者たちの手によって日本文学史の中に埋もれていた女性作家が発掘され、評価を与える研究が大変に活発で、樋口一葉や田村俊子、宮本百合子や吉屋信子らもこの動きの中で大きく研究が進められた。これに大いに刺激を受け、佐多を皮切りに、以後近現代日本の女性文学研究に取り組んでいる。

佐多稲子は94歳までほぼ現役作家として長い期間書き続けた作家だが、その中から1935年頃以降、すなわち昭和10年代の佐多の動向を追っている。『くれない』という代表作が書かれたのはプロレタリア文学運動が壊滅したこのころで、思想のよりどころも失い、同志であった夫との信頼関係も揺らぎ、自身をモデルにしたヒロインが、女性には女性ならではの苦しみがあることに目覚め、自分はこれからそれを書いていきたい、という宣言がなされ、以後、それに応えて女性を描いた小説が、終戦までに実に80編以上生み出されていく。

戦時下の佐多は戦地慰問にも赴き、時局迎合的な発言もあり、戦後にはその責任を問われ、自らも自責の念に苦しんでいるが、書き残された小説群にはそれぞれのヒロインが戦時下女性の負った様々な苦しみを訴えており、それは公的な資料にも検閲の厳しかった流通出版物にも書き残されていない、貴重な戦時下の記憶として重い価値を示している。佐多はたいへん巧みな筆致で検閲をくぐりぬけ、戦時下ファシズムに苦しむ女性たちを見つめ続けたといえ、それを読み解くことには大きな意義があると考えている。

現在はもっと幅広く近現代の女性作家を視野に入れるようにし、その中で佐多にどのような位置づけができるのか、さらには男性作家の動きにも改めて目を戻し、自分なりの文学史を描くことを目指しつつ、その中に女性文学、佐多稲子文学がどのような意味を持つのか考えることを目標としている。

提供可能な設備・機器：

名称・型番（メーカー）

名称・型番（メーカー）	